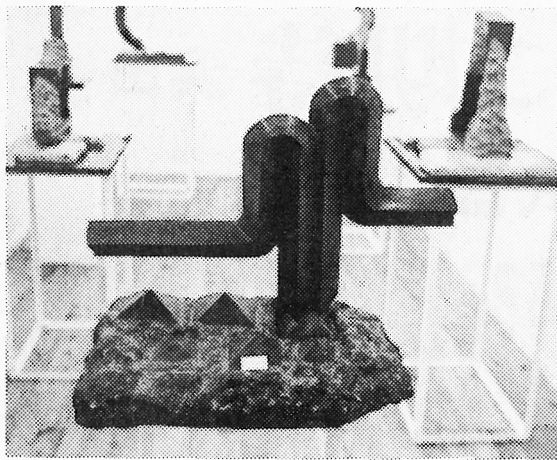


展評

丸山彫刻展の印象を一言で言えはこうである。「丸山さんの彫刻は書と見つけた」

真新しい白い壁面のギャラ



「風景のかたち」—丸山展から

りに、くっきりと黒みかけ石の彫刻が十数点置かれてあり、その配色が、白紙と墨という連想を生んだのではない。それは、書のもつバランス感覚が、丸山さんの彫刻にあはまるように思えたからである。彫刻の立たせ方に独特の工夫があり、ドッカーンとやほったくなく、あたかも

中空に彫刻が出現したかのようで、浮遊感があり、さすがにうまい。石のみがきも完璧である。

空間認識というよりは、きわめて暗示的な間(ま)の感性といったものが作品に透底しており、これは丸山さんの技の一つでもある。

丸山さんの彫刻との最初の出会い、わたしが在東京の

石彫シンポジウムに参画をまき散らしながら、息をはずませながら砥石で石をみがく工程がほとんどであり、ノミを使うのは補助的、ノミあとは意匠であることが多い。

たしかに、ハンマーをふるいノミでもって石を彫っていく行為は、われわれ彫刻をする者にとって心地よい充実感があり、ある種ノスタルジックな気分にとれる。しかし、石を彫るのにノミをほとんど使わないことは、彫刻にとって何の弱味でもない。特に今回のような花こう岩の小品作品の場合、ノミを使って彫り出すのは、ほとんど不可能に近いことであろう。

間の感性と彫ること

丸山彫刻展

ところで一九六八年か九年である。丸山さんが今回の個展のパンフレットで「この小さな作品のなかにノミあをいっ

当時、丸山さんは一陽会に出品していて、四角い石から女性の側面のシルエットを彫り出すという作業をしていた。マネキンのようであり、ポップで明らかに石の作業としては新しかった。そのころから野外彫刻が目まはじり出すような大きな作品なら

ばいざ知らず、実際は、電動カッターやサンダーがほり

(能勢孝一郎・彫刻家)